

「主に喜ばれること」

エペソ人への手紙 5 : 10 - 14

November.24.2024

エペソ人への手紙 5 : 10 - 14 (パウロ)

## Preface

「誰かに喜ばれること」を考えることは、楽しいことであり、幸せなことであり、喜びだと思えます。

面白いのは、喜んでもらいたいと思っているその対象となる人だけが喜ぶのではなく、喜びを提供したいと、「喜ばれたい」と思って考えているその当人にとっても、喜びだということです。

もちろん、ありがた迷惑なんていうこともあるかもしれませんが、真に「喜ばれること」というのは、喜ばせたいと思っている当人だけだったり、してもらっている側だけが喜んでいていただけだったり、片一方だけの喜びではなく、両方の、相互にとって喜びとなるように思います。

また、「喜んでもらいたい」と考えながら準備したそのものやこと自体の出来不出来よりも、本当に嬉しいなあと思うのは、「喜んでもらいたい」と思ってくれていたこと、そう思いながら時間を使い、お金を使い、頭を使い、心を砕きながら、「喜んでもらいたい」と準備してくれていたというその気持ち自体が喜びになるように思います。

例えば、マナ愛児園の子どもたちから、お茶会の招待状が届くことがあります。その招待状は、お店で買った綺麗な文字や上手い絵や可愛い飾りなどがされているカード等と比べますと、字も曲がったりひっくり返ったりして読みにくいですし、絵や飾りだって、ほっこりするような素晴らしく可愛いものがありますが、店で売っているカードのように洗練はされていません。

でも、その小さな手で作った手作りの招待状から感じるのは、「招待する牧会スタッフの先生方に喜んでもらいたい」というその気持ちと温もりですよ。

その気持ちや温もりが嬉しくて、互いにとって喜びとなります。

「大切な人に喜んでもらいたい」ということを考えていましたら、大学生の頃、妻と、日本と韓国の遠距離恋愛をしていた時のほろ苦い失敗を思い出しました。

久しぶりに私に会いに日本に来る彼女を成田空港に迎えに行く時に、「何かサプライズしたいなあ」と思いまして、当時の僕なりに考えてしたのが、花屋でアルバイトをしている友人に頼んで、お金が無いなりに、奮発して花束を作ってもらい、その花束を彼女にプレゼントすることでした。

「ただ花束をプレゼントするだけでは、『あなたのことが好きなのです』と

いう気持ちが表れないなあ」と思い、いつもぼろっつい半ズボン半袖にサンダル姿でしたので、彼女に喜んでもらえたらとネクタイ姿で、恥ずかしいのを押し殺して、花束をもって空港の到着ゲートに向かいました。

もうベタ過ぎる格好だったので、彼女が到着ゲートから出て来るのを待っている間も人目が気になって恥ずかしかったのですが、ついに彼女が出て来ました。

すると、ちょっとびっくりしたような、彼女の方も人目が気になってか恥ずかしそうな満面の笑顔で、「え、どうしたの？ そんな格好して。花束、ああ、私、花束好きじゃないの！」という一言で見ても無残に私の「喜ばせたい」という気持ちは散りました。

でも、こうほっこりしている気持ちは、互いに変わらないですね。

その時の私の「喜んでもらいたい」という気持ちは、「喜んでもらえたかなあ」と、今でも思っております。

## Part One

すみません。

今何が言いたいのかと言いますと、先程読みましたエペソ5：10にある御言葉、「何が主に喜ばれることなのかを吟味すること」というのは、クリスチャンとなったら、やらずにちゃいけない義務とか責任とか修行とか修練のような宗教的行為ではなく、ただ、「喜び」だということです。

神に喜んで頂けることが、私の喜びにもなっている。

「何が主なる神様に喜んで頂けることなのか」なんて考えたこともなく、自分のことを喜ばせたいことだけに集中し、注目し、執着していたそんな自分が、まあ今でもそんな大差ないかもしれませんが、それでも主なる神様に喜んで頂けることが嬉しいと思えるようになっている。

「何が主に喜ばれることなのかを吟味しなさい」という御言葉が、「ああ、そうだなあ」と喜びに思え、平安を覚えるようになっているということが、先ず感謝なことだなあと思うのです。

「神に喜んで頂けること」と言いますと、何かこう堅っ苦しい、「こうしなくちゃいけない、ああしなくちゃいけない。愛さなくちゃ、祈らなくちゃ、赦さなくちゃ、寛容でいなくちゃ」というような所謂、「それをしなくちゃいけない」という信仰者としてなすべき良い行いを決める判断基準のような思いが先行して、「出来ているのか、出来ていないのか」ということが目に付くようになってしまうかもしれません。

でも、先程の話の中にもありましたように、「喜んでもらいたい」というのは、「出来不出来」を計ることではなく、その気持ち・心持ちが大事だということですよ。

例えば、愛するということが、当然神さまが最も喜んで下さることだと思いま

すが、言葉で言うのは難しいことではないですし、小さな愛するということは日常の中であらわせるかもしれませんが、イエス様の仰る「敵を愛する」というような愛となりますと、何と掴みがたく、何と深く、何と高く、達成したとか、成し遂げたとかという感覚を得ることが、何と難しいことか。

愛したいと思ってしたその小さな愛がたとえ「出来た」と思っても、しばらくして思い浮かんでくる気持ちは、「いやいや、まだこんなもんじゃないよな。愛ってやつは…」という思いではないでしょうか。

赦すということもそうだと思います。

赦すと決めて、赦したとしても、振り返ると許せない気持ちがまた湧き上がってきてしまう。

いや、そのことに関しては赦せたけれども、また同じ人から、新たな許せないことが出て来た。

「なんとまあ、赦すとは、困難なことなんだろうか」と、神さまの前に、主イエス様の前に正直に告白して、降参するしかない時間が少なくないかもしれません。

もし神さまに、私たち、出来不出来を問われてしまったら、不出来でしかないように思います。

じゃあ、私たちはどこまで行っても神さまに喜んで頂けないのでしょうか？  
違いますね。

神さまは、私たちを喜んでくださいます。

どういうところを？

その存在を。

そして、その気持ちを、葛藤を、神に喜んで頂きたいというその温もりを喜んで下さいます。

失敗しても、足りなくても、不細工でも、いびつでも、しようとしたその心持ちを失敗とは決して見なさないお方が、いや、その気持ちを喜んでくださるお方が主なる神様、イエス様ですよ。

そして、安定して決してぶれることなく喜んでくださる方に喜ばれることを、そんなに上手くやれなくても、安心してしたいと思えるから、その安心・平安が私たちにとっても喜びとなります。

「何が主に喜ばれることなのかを吟味する」という葛藤の中にいますと、不思議と導かれて、愛したい、赦したい、愛さずにはいられない、赦さずにはいられない、愛さないことの方が、赦さないことの方が、むしろ居心地が悪く思えてきてしまう。

先週見ましたエペソ 5：9にあります通り、桜の木が桜の花を咲かせるのが当然であり自然であるように、「主イエスにある光の子が光の実を結ぶ」という当然のところへと、自然なところへと導かれて行くでしょう。

出来不出来を問われない、ただただ、主の豊かなあわれみと恵みによって、

神も私も喜ぶるところへと導かれて行くんだと思います。

「何が主なる神に喜ばれることなのかを吟味すること」は、神と人との、神と私との相互の喜びとなります。

## Part Two

今日の聖書の言葉を黙想していると、二人の聖書の登場人物が思い浮かびました。

イスラエルの2代目王だったダビデとイエス様の弟子のイスカリオテのユダです。

ダビデとイスカリオテのユダのその人生における目に見える悪さを、現代日本に生きる私たちの持つ一般的などいましょうか、社会一般的な倫理道徳観をもって比較するならば、ダビデの方が明らかに、遥かに悪い人だと思います。

ダビデという方は、神を信じるということにおいて純粋な方だったので、晩年、主の宮を建築したいという思いに駆られて神殿建築を試みますが、神さまから、「あなたの手はあまりにも多くの血を流し過ぎた」と言われ、「神殿建築をしてはならない」と禁じられました。

ある意味、戦争が当時の中東世界の動き・歴史そのものであったために、一国の王として戦わないわけにはいかず、主に祈りつつも、致し方なくたくさんの人々をその手にかけてきましたが、そんなダビデに対して、父なる神様は、「殺してはならない」という神の言葉に反する人生を生きた罪を真っすぐにご指摘になりました。

ダビデは、神をも認める、多くの人のいのちをその手にかけた人でした。

さらには、性的乱れ、女性関係も派手で、サウルから逃れながらも4人の女性を妻にしたり、自らの性的欲望を満たすために部下の命を奪うことまでしたり、亡くなる間際には妻以外の若い女性を抱きしめて寝ていました。

「姦淫してはならない、隣人の妻を欲してはならない」という神の言葉を守らなかった、守れなかった、見ようによっては、善人ぶった悪党とも言えるかもしれません。

それに対して、イスカリオテのユダは、聖書に記されていることでしか判断出来ませんが、彼がやった目に見える悪さと言え、イエス様を銀貨30枚で裏切ったということだけです。

特にそれ以外の落ち度は見られません。

なのにです。

聖書の中に、「わたしはダビデを愛す」という何度も出て来る神の言葉に対して、イスカリオテのユダは、神に喜ばれない人の代表格のような扱われ方をしています。

じゃあ、この二人の違いは何だったのか？

ダビデはそれでも、「神に喜ばれることは何だろうか」と、愛そうと努め、赦そうと努め、祈ろうと努め、戦って目の前にいる人を倒さなければ生きることの出来ないような身分にあっても、神に喜ばれることを考えました。

どんなにいびつでも、どんなに不細工でも、どんなに後ろ指さされようとも、神に喜ばれることを考え、表し、神との関係を保ち続け、神との語らいを最も大事にしました。

ただ神との関係を保ち続け、神との語らいを大切にするという事は、自らの暗闇のわぎを明るみに出すことが必ずや伴ってきます。

ダビデは、神さまの前に素っ裸になることを、口にするのも恥ずかしいような事を、自らの肉のわぎを、神という光なるお方の前に、メシヤ・キリストという光なるお方の前に正直に明るみに出そうとすることにおいて躊躇しませんでした。

そして何よりも、出来不出来ではなく、神の前にあって暗闇のわぎを行わずには生きられない罪人であることを正直に認めました。

その犯してきた数々の罪をキリストという光の前に明るみに引き出され、明らかにされることを拒まないみじめな罪人であることを神の前に隠さない姿を、神は喜んでくださるということを疑心なく信じていました。

そして、ダビデにとっても、それは喜びでした。

人にとって最も安心出来ることのうちの一つは、自分しか知らない暗闇を安心して明るみに出せることではないでしょうか。

夫婦関係もそうですし、友人関係だってそうですし、仲間同士やクリスチャン同士もそうだと思いますが、自分の闇の部分をごだけ正直にその人に明かせるのが、その関係における喜びの度合いに比例すると思います。

ダビデにとって神さまは、安心して、自らの暗闇のわぎを、肉のわぎを明かすことの出来る唯一の存在でした。

時には、神の前に自らの闇を明るみに出すことは、人前にあってもその闇を晒してしまうことにも繋がりますし、実際、ダビデのそのような姿を聖書はちゃんと神の言葉として記してくれています。

そんな彼の正直な姿が、ごだけ多くの人々を安心させ、慰め、励まし、それでも愛されているんだという信仰に立ち返らせたことでしょうか。

### Part Three

一方イスカリオテのユダは、ダビデに比べたら、目に見える悪いことはそんなにしていないかもしれません。

でも彼は、頑なに、神に喜ばれる最も基本的なこと、正直に自らの暗闇のわぎを明るみに出すということを拒み続けました。

「そんな恥ずかしいことをするくらいならば、自らで落とし前を付ける」と、

一見すると潔いようにカッコいいように見えますが、神の前には嘘つきで、不誠実で、結果的に神にも喜ばれず、自らも喜ばず、自分以外の人にとっても喜びとはなりませんでした。

最後までキリストの光に照らされ、明るみに引き出されることを拒み、イスカリオテのユダは亡くなっていきました。

### Conclusion

今日の御言葉をもう一度読んでみたいと思います。

#### エペソ人への手紙 5 : 10 - 14 (パウロ)

神に喜ばれる先ず第一のことは、何をするのか、何をしないのかという出来不出来ではなく、神の前に自らが暗闇のわざを行ってきた罪人であることを正直に認め、告白し、祈り、口にすることも恥ずかしいような事をキリストの光によって明るみに引き出されることを拒まないことです。

そうすれば、眠っている人が起き、死んでいる人が生き返るかのようなのちの復活が、霊の再生と刷新がキリストに照らされて起こることでしょう。

主なる神様の前にあって、自らの罪をさらけ出せること以上の喜びは、人にはございません。

そして、そのことを神は喜んで下さいます。

そうしてから、「主の喜ばれることは何なのか」と吟味しつつ、愛すること、赦すこと、祈ること、礼拝すること、寛容でいること、親切でいることなどの行いは、失敗しながらも、いびつでありながらも、不細工でありながらも、神の時に適って実を实らせていくことでしょう。

その実は、高級スーパーで売られている傷一つない高級な実では決してなく、傷だらけで、日焼けもして、形もいびつで、泥も付いているかもしれないけれども、キリストの血によって洗い流され、キリストの血によって白くされた衣を纏わせて頂きますから、どんな実よりも美しく、神さまはその実を喜んで召し上がって下さることでしょう。

私たちの信仰生活において問うことは、出来不出来ではなく、その心の、たましいの、霊の向いている方向がどこなのか、誰に、何に繋がりを続けているのかに掛かっています。

最後に、イエス様の私たちへの愛の、慰めの、励ましのお言葉を読んで終えたいと思います。

#### ヨハネの福音書 15 : 4 - 5 (パウロ)

主イエスにとどまり続け、繋がっていることを忘れない私たちでありたいと願います。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ 5：10、14c